

大学生の家庭科「住」分野と インテリアに対する意識の男女差

澤 島 智 明

Gender Differences of University Student's Attitude to Housing Field of
Home Economics Education and Interior Coordination

Tomoaki SAWASHIMA

要 旨

本報は大学生を対象として、家庭科「住」領域に対する評価、インテリアへの興味、部屋作りの現状などを把握することにより、家庭科教育でインテリアに関する知識を学ぶことの意義を考察することを目的とする研究の続報である。教員養成系学部の学生を対象にアンケート調査を行い、家庭科教育やインテリアに対する意識の男女差を分析した結果、次の知見を得た。1) 家庭科各領域の楽しさと有用性を評価させたところ、すべての領域において女性の評価が高かった。2) 男女ともに大学生のインテリアへの好感度は高く、家庭科教育で取り扱うことに肯定的であった。3) インテリア学習のテーマとして女性の方が多くのテーマに興味を示し、特に室内装飾に関するテーマで男性よりも興味が高かった。一方、男性は全体的に興味は低いが、技術的なテーマでは相対的に女性よりも興味が高かった。4) 自室のインテリアを整えるために重要なものは「お金」「センス」であると考える割合が男女ともに高かったが、男女を比較すると男性は「知識」を女性は「時間」「センス」を重要と考える傾向があった。5) 部屋作りに関して抱えている悩みは女性の該当率が高く、特に「うまく収納できない」「生活感がありすぎる」では男性の倍以上の該当率となっていた。また、部屋作りの満足度は女性の方が若干低かった。男性よりも部屋作りに対する意欲が高い分、自室に対する評価が厳しくなっている可能性もある。

1. はじめに

本研究は大学生を対象として、彼らが小学校から高等学校で受けてきた家庭科教育の「住」領域に対する評価、インテリアへの興味、実際の部屋作りの現状などを把握し、その関連性を見ることにより、家庭科教育でインテリアに関する知識を学ぶことの意義を考察することを目的とする研究の続報である。前報では、教員養成系学部の学生を対象に家庭科「住」領域、インテリア学習、自室の部屋作りに関するアン

ケート調査（2010年調査）を行った結果から、1）大学生のインテリアへの関心の高さやインテリア学習への肯定的態度から考えて、高等学校までの家庭科教育でインテリアを取り上げることが、生徒の住領域への興味を喚起する可能性が高いこと、2）多くの大学生が問題を抱えている事項、例えば「収納」に関する技術的内容を取り入れることで、住領域の学習内容が実生活に直結する、より実践的なものになることが期待できること、3）多くの大学生がインテリア学習を肯定しながらも家庭科教育に必須ではないと考える一因として、部屋作りには「お金」や「センス」という学習では獲得できないものが重要であり、「知識」を身に着けても役に立たないという誤認があると思われることなどを指摘した。さらに、家庭科教育でインテリアを取り扱うことの最も重要な意義はそのような認識を変え、身の回りの環境に積極的に関与するきっかけを与えることであると述べた。

本報では、2010年調査とほぼ同内容のアンケート調査を2011年度と2012年度に行ってサンプル数を増やした上で、家庭科教育やインテリアに対する意識の男女差を分析した。

2. 調査概要

佐賀大学文化教育学部の学生を対象に授業時間を利用してアンケート調査を行った。時期は2010年7月、2011年4月、2012年4月。アンケートは選択式で授業の終了前15分程度の時間を使い、配布、記入、回収を行った。2011年と2012年の調査票は2010年の調査紙をマークシート形式で作り直したもので、設問によっては選択肢が若干異なっている。主な内容は（1）小学校～高等学校の家庭科学習の評価、およびインテリア学習に対する意見（2）自室の部屋作りの現状と意識である。アンケート設問の概要を表1に示す。

表1 アンケートの質問項目

- | |
|--|
| <p>1) 小学校～高等学校の家庭科学習、およびインテリア学習について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「衣」「食」「住」「家庭生活と家族」の「楽しさ」「有用性」評価 ・家庭科「住生活」領域の好き嫌い ・インテリアの好き嫌い ・家庭科教育にインテリア学習を取り入れることの賛否、及びその理由 ・取り入れた際に学んでみたい内容 <p>2) 自室の部屋作りについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部屋作りの「こだわり」 ・欲しい家具、必要な家具 ・部屋作りにおける悩み、やってみたいこと ・部屋作りの満足度 ・部屋作りに必要なもの ・知識・センスの取得方法 |
|--|

3. 結果・考察

授業時間中に配布・回収を行ったためアンケートの回収率は100%であり、回答者のほとんどが文化教育学部の学生であった。有効票は440票。回答者の属性は次の通りである。

性別構成・・・男性141人 (32.0%)、女性295人 (67.0%)、不明4人 (0.9%)

学年構成・・・1年30人 (6.8%)、2年252人 (57.3%)、3年124人 (28.2%)、4年31人 (7.0%)

居住形態の構成・・・自宅生182人 (41.4%)、下宿生240人 (54.5%)、不明18人 (4.1%)

(1) 家庭科「住」領域に対する意識の男女差

図1、図2は学生が小学校から高等学校まで受けてきた家庭科教育の内容に関して「楽しさ」と「有用性」の点から各領域を評価させたものである。2010年調査において衣、食、住、家族の領域に関して順位付けさせたところ、「楽しさ」「有用性」とも食、衣、住、家族の順になり、男女差は見られなかった（前報参照）。2011・12年調査では4領域それぞれを5段階で評価させたところ、2010年調査の順位が高い領域ほど評価が高く、その傾向は男女共通であった。しかし、評価の絶対値は「楽しさ」「有用性」ともに全領域で女性の方が高く、「有用性」における「食」領域以外で有意な差が見られる。例えば「楽しさ」における「衣」領域では「楽しかった」「少し楽しかった」を合わせた割合が女性の方が30ポイント程度高い。また、「住」と「家族」領域は内容を「覚えていない」という回答が一定数あり、男性に多い。

図3は「住」領域の好き嫌いを5段階で評価したものである。他領域との順位付けでは評価の低かった「住」領域であるが、「好き」「やや好き」合わせれば割合が男性で30%強、女性で40%強あり、「嫌い」「やや嫌い」合わせた割合（約10%）を大きく上回っている。「住」領域の学習が忌避されているわけではないことは前報で報告した通りである。一方、男性の55%、女性の45%が「どちらとも言えない」と回答しており、図1において「覚えていない」と男性の20%弱、女性の10%弱が回答していたことと合わせて、高校までの「住」領域の学習内容があまり印象に残っていない様子が伺える。

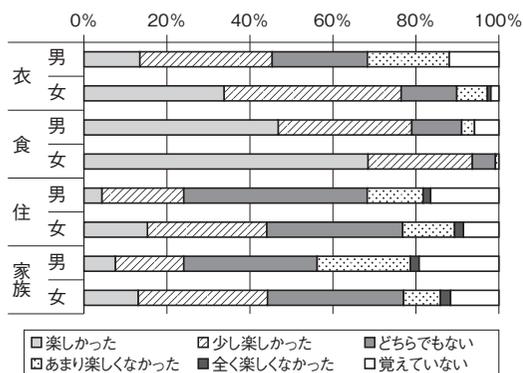


図1 家庭科各領域の「楽しさ」
(n=202；男性 n=66, 女性 n=136)
2011, 12年調査

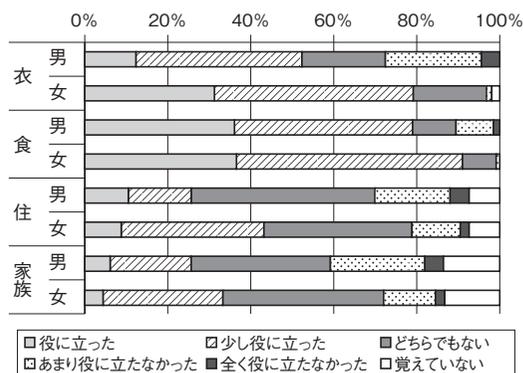


図2 家庭科各領域の「有用性」
(n=202；男性 n=66, 女性 n=136)
2011, 12年調査

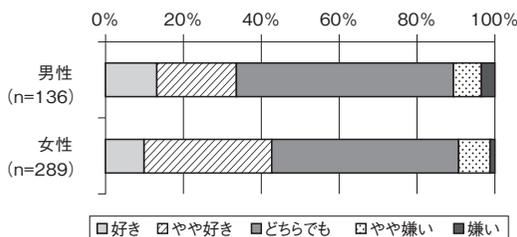


図3 家庭科「住」領域の好き嫌い (n=425)

(2) インテリアに対する意識の男女差

図4はインテリアの好き嫌い、図5はインテリアに関する内容を小学校から高等学校の家庭科教育で取り扱うこと（以降「インテリア学習」とする）に対する賛否である。両設問とも「どちらでもない」を中立とした5段階で回答を得ている。インテリアの好感度は女性が有意に高く「好き」の割合で10ポイント強、「好き」と「やや好き」を合わせた割合では約20ポイントの差がある。しかし男性のインテリアの好感度が低いわけではなく、「嫌い」「やや嫌い」という回答は合わせて2%（3名）のみであった。一方、インテリア学習については男女とも約8割が肯定的（「良い」および「まあ良い」）であり有意な差はなかった。男女ともに大学生のインテリアへの好感度は高く、家庭科教育で取り扱うことに肯定的といえる。

図6にインテリア学習に賛成する理由、図7に反対する理由を示す。賛成する理由では「興味があるから」で男女に有意な差が見られ、女性の方が男性より20ポイント程度該当率が高い。「好きだから」も女性の該当率が高いことと合わせて、女性のインテリアへの好感度の高さを反映したものと言える。一方、男性の方が該当率の高い項目は「生活に役に立つ」「必要性がある」という実用性、必要性に関わるものである。また、取り入れに反対する意見自体が男性8人、女性12人と少数であるが、反対する理由として「生活に役に立たない」「生きるのに役に立たない」を挙げた男性がそれぞれ4人、3人おり、女性の該当者数を上回っている。賛成、反対ともに男性の方が実用性に関する理由が挙げられる割合が高く、男性が家庭科での学習に実用性を求めていることを示唆している。

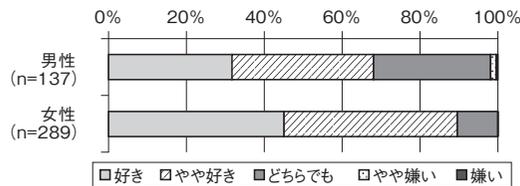


図4 インテリアの好き嫌い (n = 426)

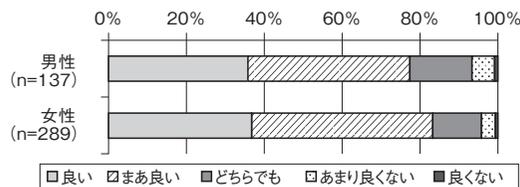


図5 インテリア学習の賛否 (n = 426)

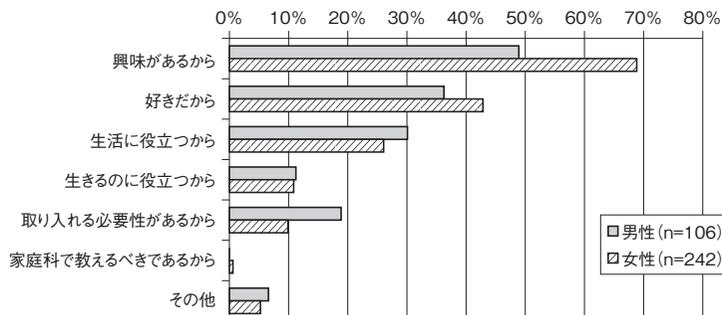


図6 インテリア学習賛成の理由 (n = 348, 複数回答)

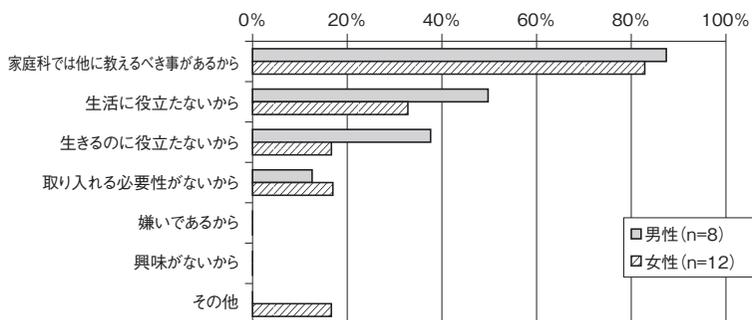


図7 インテリア学習反対の理由 (n=20, 複数回答)

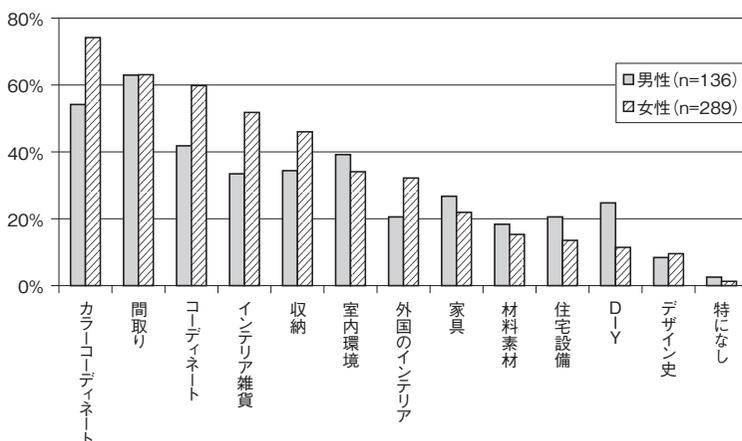


図8 学んでみたいインテリア学習のテーマ (n=425, 複数回答)

図8はインテリア学習を小学校から高等学校の家庭科で取り扱うと仮定し、その際に自分が学んでみたいことを選択（複数回答）したものである。女性の最多は「カラーコーディネート」で70%を超える学生が選択しているが、男性はそれよりも20ポイント程度該当率が低く、男女差が現れている。「間取り」は男女とも該当率が高く60%を超えている。全体として女性の方が多くの内容に興味を示しており、「カラーコーディネート」「インテリアコーディネート」「収納」「インテリア雑貨」では有意差が見られた。一方、男性の割合が高かった項目は「室内環境」「住宅設備」「DIY」「材料」など技術的な内容であり、中でも「DIY」では男性が10ポイント程度高く有意差が見られる。前報では、大学生の関心が室内装飾に関わるテーマに集中しており自分が生活する空間を視覚的に美しくする方法に対して興味が高いといえること、また、大学生にとって興味あるテーマは、知識や技能を身につけるものでなく、実生活で手軽に生かせるものであることを指摘した。今回の分析では、このような傾向は特に女性に顕著に現れており、男性は若干異なる傾向を示している。

(3) 部屋作りの現状と意識の男女差

図9は部屋作りの満足度について5段階で評価させた結果である。男女共に「満足」「おおむね満足」合わせて50%程度であり、「不満」「やや不満」を合わせた割合（約30%）を上回っている。男性の満足度が若干高いが有意な差はない。

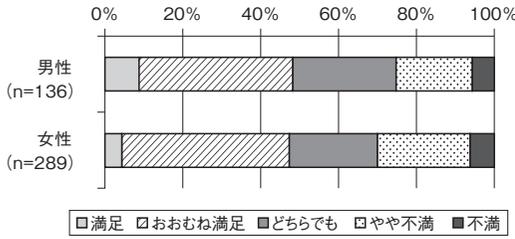


図9 自室の部屋作りの満足度 (n = 425)

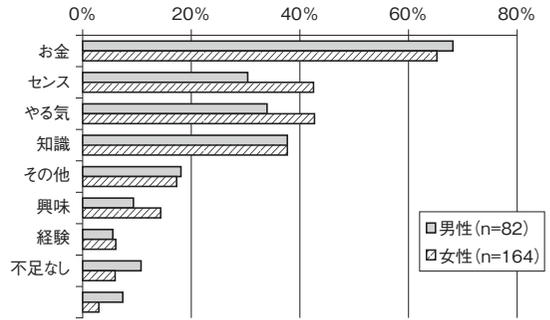


図10 部屋作りに足りないもの (n = 246, 複数回答)

次に2010年調査では「不満」「やや不満」の回答者に対して、2011・12年調査では全員に対して「自分の部屋作りに、何が不足しているのか」を複数回答で聞いたところ、2010年調査では「お金」「時間」「センス」が多く挙げられた（前報参照）。2011・12年調査において2010年調査で自由回答の多かった「やる気」と「興味」を選択肢に追加したところ、男性では「やる気」の該当率（37%）が「お金」に次いで高かった（図10）。また、男女を比較すると「時間」「センス」の項目で女性の該当率が有意に高い。

図11は部屋作りに必要と考えるものを選択肢の中から1位から3位まで順位付けした結果である。ここでも「お金」「センス」が多く挙げられ、次いで「時間」が挙げられている。「お金」は非常に選択率が高く、男女共に8割を超える学生が1位から3位のいずれかに挙げている。「センス」も男女差はあるが7割を超える学生が選択している。また、男女差が見られた項目では男性は「知識」を女性は「時間」「センス」を重要と考える傾向がある。有意な差はないが「やる気」「経験」「興味」の選択率でも男性が女性を若干上回っている。

図12は部屋作りのための知識やセンスを獲得にはどうすればよいかを質問した結果である。女性の該当率が高い項目が多く、特に「家族・友人の意見を参考に」では男性を20ポイント程度上回っている。男性の該当率が有意に高い項目は「必要なし」以外では「経験を積む」のみである。また、前報でも述べたように「小学～高校の家庭科」に期待する数は非常に少なく、男女とも選択肢の中で最少である。

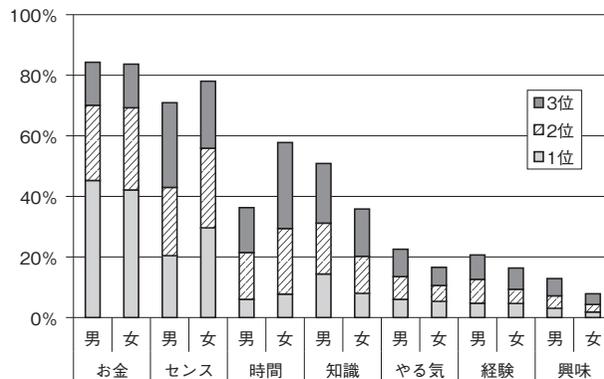


図11 部屋作りに必要なもの(上位3つに順位付け)
(n = 410 ; 男性 n = 132, 女性 n = 278)

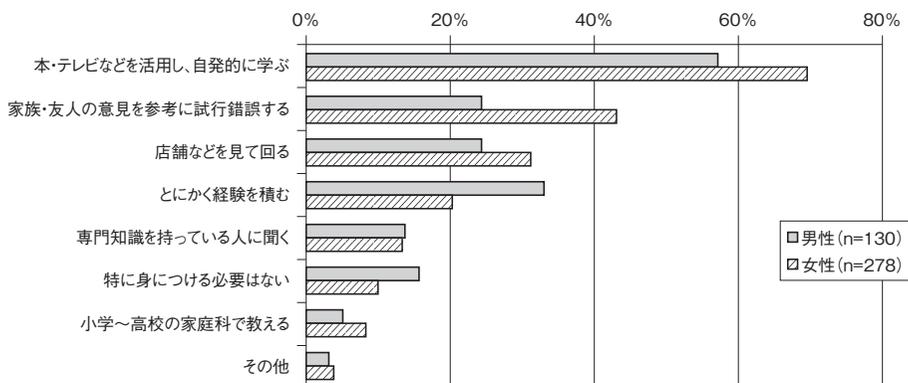


図12 部屋作りの知識やセンスを獲得する方法 (n=408, 複数回答)

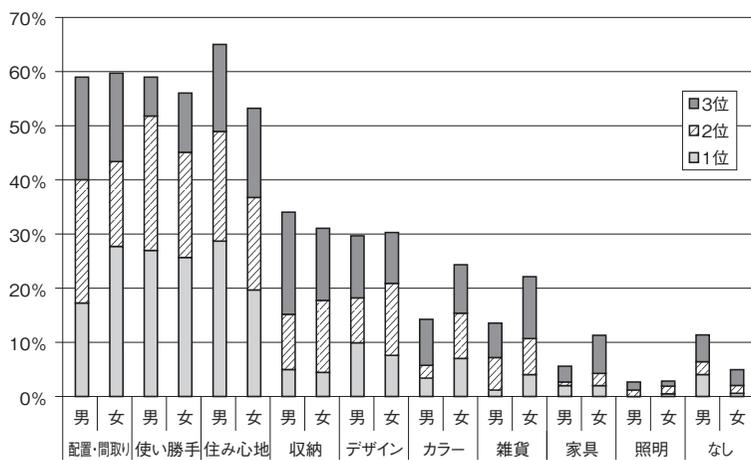


図13 自室の部屋作りで重視したこと (上位3つに順位付け) (n=422; 男性 n=137, 女性 n=285)

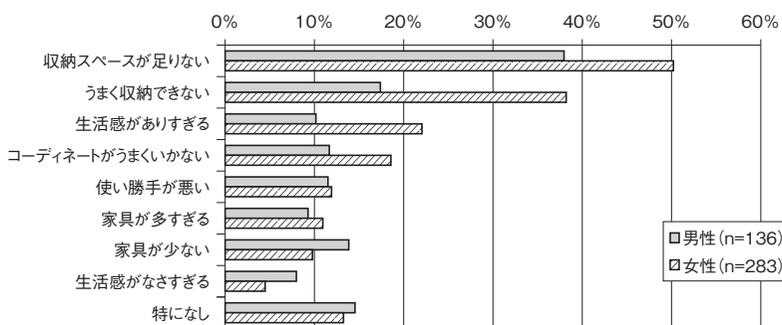


図14 自室の部屋作りで困っていること (n=419, 複数回答)

図13は自分の部屋作りに際して重視した項目を1位から3位まで順位付けした結果である。2010年調査と傾向は変わっておらず、「使い勝手」「配置・間取り」「住み心地」の3項目が順位においても総数においても他項目よりも重視度が高い。前報で指摘した通り、大学生が部屋作りに際して生活空間としての基本的

機能を優先させていることが分かる。また、そのような傾向は男女に共通の傾向といえる。一方、「カラー」「雑貨」「家具」いった装飾的要素や後付け可能なモノでは男性の該当率が非常に低いために、結果として男女差が現れている。

図14は部屋作りに関して抱えている悩みについて質問した結果で、収納に関する悩みが多いことは前報の通りである。男女を比較すると、ほとんどの項目で女性の該当率が高く、特に「うまく収納できない」「生活感がありすぎる」では男性の倍以上の該当率となっている。女性の方が所有物が多いためと思われるが、男性よりも部屋作りに対する意欲が高い分、自室に対する評価が厳しくなっている可能性もある。

4. おわりに

教員養成系学部の学生を対象にアンケート調査を行い、家庭科「住」領域とインテリアに対する意識の男女差を分析した結果、次の知見を得た。

- 1) 小学校から高等学校の家庭科学習の楽しさと有用性を評価させたところ、すべての領域において女性の評価が高かった。また、「住」と「家族」領域は内容を「覚えていない」という回答が一定数あり、男性に多かった。
- 2) 男女ともに大学生のインテリアへの好感度は高く、家庭科教育で取り扱うことに肯定的であった。
- 3) インテリア学習のテーマとして女性の方が多くのテーマに興味を示し、特に室内装飾に関するテーマでは男性よりも興味が高かった。一方、男性は全体的に興味は低いが、技術的なテーマでは相対的に女性よりも興味が高かった。
- 4) 自室のインテリアを整えるために重要なものは「お金」「センス」であると考えた割合が男女ともに高かったが、男女を比較すると男性は「知識」を女性は「時間」「センス」を重要と考える傾向があった。
- 5) 部屋作りに関して抱えている悩みは女性の該当率が高く、特に「うまく収納できない」「生活感がありすぎる」では男性の倍以上の該当率となっていた。また、有意差はなかったが部屋作りの満足度は女性の方が若干低かった。男性よりも部屋作りに対する意欲が高い分、自室に対する評価が厳しくなっている可能性もある。

以上のようにいくつかの項目で男女差がみられたが、このような傾向は学生のジェンダーバイアスによる可能性もあり、今後さらに研究を進める必要がある。

注1) インテリアは広義には「建築物や部屋の内部空間」、狭義には「室内装飾や室内調度品」を指すが、アンケートではインテリアの定義は明示せず、回答者の持つイメージに任せている。

注2) インテリア学習の賛否については学習者、教育者いずれの立場で回答するかは指定していない（学習者の立場で回答した学生が多いと思われる）。

本研究に関連する既発表論文

- 1) 澤島智明：大学生の家庭科「住」分野とインテリアに対する意識、佐賀大学文化教育学部研究論文集17(1)、89-97、2012。

参考文献

- 1) 小沢紀美子編：豊かな住生活を考える－住居学、彰国社、pp.100-102、2002。
- 2) 奈良女性大学生生活研究室編：住生活と住教育、彰国社、pp.225-250、1993。
- 3) 尾崎沙和子：家庭科教育における住生活領域指導についての私見、女性栄養大学紀要、40、pp.49-57、2009。

- 4) 正岡さち, 高嶋智恵: 小学生の住意識と住教育に対する意識, 島根大学教育学部紀要, 教育科学・人文・社会科学・自然科学, 44, pp.41-48, 2010.
- 5) 宮崎陽子, 岸本幸臣: 大学生による高等学校家庭科における住居学習の評価と課題, 日本家政学会誌, Vol. 59No. 4, pp. 245-253, 2008.
- 6) 湯川聰子, 谷崎通子, 原佐緒理: 教師の立場からみた住居領域内容について-高校家庭科における住教育内容の提案(第一報), 日本家政学会誌, 45(5), pp. 431-435, 1994.
- 7) 湯川聰子, 原佐緒理: 生徒の学習要求と教師側意見の比較-高校家庭科における住教育内容の提案(第二報), 日本家政学会誌, 47(10), pp. 1015-1021, 1996.
- 8) 立松麻衣子, 湯川聰子: 住居学習に関する教師と生徒の関心の所在-中学校技術・家庭科における住教育内容の検討(第一報), 日本家政学会誌, 54(5), pp. 387-394, 2003.
- 9) 久保加津代: 高等学校家庭科教科書にみる持続可能な社会をめざす住生活力, 日本建築学会計画系論文集, 第75巻第656号, pp. 2423-2430, 2010.
- 10) 宮崎陽子, 多治見左近: 住生活についての大学生の学習指向-家政・生活科学系学生の場合, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系(51), pp. 685-688, 2011.
- 11) 中山節子, 古重奈央, 鎌野育代, 他: 住まいの学習における「空間の生命化」の教材化-小・中・高における授業実践, 日本家政学会誌, 62(9), pp. 611-622, 2011.
- 12) 妹尾理子, 大矢英世, 金子京子, 他: 住教育のカリキュラム開発に関する実証的研究-家庭科の可能性をひらく授業づくりの理論と実践, 住宅総合研究財団研究論文集(36), pp. 411-422, 2009.